

令和7・8年度 主題研究

『令和5・6年度の成果と課題』と『令和7・8年度の研究構想』

令和5・6年度 児童と教師の成果

- 主体的に学習を進める意識や自信が付いてきている。
- 「大堂津小授業スタイル」が定着している。
- めあてとまとめの整合性や習熟の重要性を認識している。
- 学力向上が図られている。
- 協働的な学びのある授業になってきている。

令和5・6年度 児童と教師の課題

- 協働的な学びに取り組むには、児童の発達段階や実態に応じた素地や能力の育成が不可欠である。
- 単元計画を柔軟に設定し、さらなる習熟を図ることが意識的につけていない。

令和7年度 校内研究の方向性

- 発達段階や実態に応じた「協働的な学び」を進める素地・能力の目標を設定し、学年部での達成ラインを確立する。
- 教師がファシリテーターとしての役割を全うし、「全員で理解」を目指した児童主体の授業を行う。
- 授業や単元計画で、習熟や思考力を鍛える時間を確保する取組を継続・新たに作成する。

令和5・6年度で身に付けたことを知識・技能として、令和7年度のゴールイメージに合わせて実践する。

令和7年度 児童と教師の課題

令和8年度 校内研究の方向性

- 達成ラインをもとに学級で指導を継続し、経年で実態把握を行う。
- 児童主体の「全員で理解」する授業を異学年児童同士で参観し、次の学年の見通しをもたせる。
- 習熟・思考力を鍛える時間を確保することを児童・教師ともに定着させ、児童主体で進める機会を増やすことで、さらなる学力向上を図る。

(例)教師の発言する機会を意図的に限定し、理解できている児童を中心に全員で理解をさせる。

令和8年度の新たなゴールイメージに向けて、令和7年度の取組を継続・ステップアップし、実践する。

令和7・8年度を通しての目標

- 教師がファシリテーターとして支えながら、協働的な学びに必要な素地・能力が段階的に示され、児童も教師もゴールイメージをもって取り組んでいる。
- 教師がファシリテーターとして支えながら、どの学年も「全員で理解」することを中心、児童が主体的に進める授業を行うことができる。
- 柔軟な単元計画を行うことを定着させ、児童主体の機会を増やすことで、さらに学力向上を図る。